

## シンボルを通して考える、教会の子どもとの向き合い方

先々週は花の日・子どもの日でした。5年ぶりに子どもたちと一緒に近所のくららホームを訪問することができまして、神様の大きな恵みを感じました。子どもたちを楽しそうに見る施設の方々のまなざしに、人を元気づけ、幸せにする子どもたちの存在の大きさ、その力を改めて実感してまいりました。6月は毎年こういうイベントがあるものですから、自然と子どもたちのことについて考えるシーズンになります。教会として神様から与えられているこれらの子どもたちとどのように向き合っていくか、教会全体でしっかりと考えたいと思うのです。

6月の祈祷会のテーマも、「子どもたちから学ぶ姿勢を大切に」とさせていただきます。これも私たち教会が子どもたちとどのように向き合っていくかという一つの考えでしょう。大人たちが一方的に子どもたちを上から教える、教育するというのではない。今日の聖書箇所でもイエス様は、「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と、神の国に入るために、自分をまったく親に委ねる子どもたちの姿から神様にすべてをお委ねする信仰を学びなさいと弟子たちを諭しておられます。このように、私たちはむしろ子どもたちから色々なことを学ぶことが多いのです。

神様のもと、子どもたちを宝物として大切にし、育まれ合う、そんな教会をこの府中の地で皆で形作っていきたくと考えています。そして今日のお話も、私たちが子どもたちとどう向き合っていくのかということテーマにお話をしていきたいと考えています。

さて、先程は聖書の中からマルコによる福音書 10:13～16 をお読みいただきました。このお話を簡単に要約しますと、まず人々がイエス様に自分の子どもたちに触れてもらって、祝福してもらおうと思ってやって来るんですね。そうするとお弟子さんたちは、「おいおい、待て待て、何をしているんだ。子どもたちを近づけるな」と、こ

の人々を叱りました。実は当時子どもというのは律法をあまりよく知らない、それゆえ守れない存在として軽んじられていたのです。しかしこのお弟子さんたちの態度にイエス様は憤慨されました。「いやいや、何を言っているんだ。子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはいけない。」そのように言って、今日のお話の冒頭でも申し上げましたように、「神の国はこのような者たちのものである」と、子どもたちの姿から信仰について学ぶように諭されました。そして子どもたちを抱き上げて、手を置いて祝福されたのです。これが今日の聖書箇所のお話です。

で、今日は少し変わった切り口でこのお話にスポットを当ててみたいと考えています。どういう切り口でスポットを当てるかと言いますと、これですね。—『pen』を見せる— 2010年の5月でしたでしょうか。ですからもう14年くらい前になりますが、この『pen』という雑誌で、別冊という形でまるまる一冊キリスト教が取り上げられたんです。一般誌でキリスト教がまるまる一冊取り上げられるというようなことは滅多にないことでしたので、当時キリスト教界では大盛り上がりになっていました。そしてこれが反響が良くてですね、またパートⅡが出されたりしていたんです。今皆さんにお見せしたのは、パートⅠの方ですね。このパートⅠのp.96～99にキリスト教のシンボルについて書かれた所があります。当時これが非常に面白くて色々と考えさせられました。今日はこのキリスト教のシンボルを取り上げて、そこからまた今日の聖書箇所に立ち返って、私たちが教会で子どもとどのように向き合っていくのかということについて、考えてみたいという風に思っています。

そもそもキリスト教のシンボルの起源ですが、それはキリスト教初期のローマ帝国の時代にまで遡ります。当時キリスト教は非合法の宗教ということで、信者として捕まった場合には死刑になってしまう可能性もありました。なので、信者はカタコンベと呼ばれる地下墓所に隠れてこっそり礼拝をやるわけです。その時にばれないように、キリスト者だけに意味が通じる符号で壁などを装飾しました。つまりそうしておくで、キリスト者でない人がカタコンベに入ってその符号を見ても、「何だ、落書きがあるな」くらいで、ここで秘密の礼拝が行われているということがばれないわけです。こうし

て、色々なキリスト教的な意味づけが与えられた符号＝シンボルが生み出されていきました。

皆さんはキリスト教のシンボルというと、どんなものをご存じでしょうか。一番有名なのは、何と言っても十字架ですね。この十字架がキリスト教の代表的なシンボルになったのは、4世紀にローマ帝国でキリスト教が公認されてからと言われています。それまでは生々しすぎて、シンボルとはならなかったのです。ローマ時代、十字架刑は最も残酷な処刑方法でしたから、「自分たちが捕まったらこれで殺されてしまう」というのをとてもではないがシンボルにはできませんでした。キリスト教公認前は十字架のシンボルがまったく用いられないというわけではなかったんですけれども、むしろ錨や魚など他のシンボルが多く用いられました。そしてキリスト教が公認され、キリスト教を信じることによって十字架刑に処される恐怖が遠のきますと、十字架が復活と死への勝利を表すキリストの象徴として用いられるようになったのです。

また植物や動物なども、キリスト教芸術などではよくシンボルとして用いられます。聖母マリアをテーマにした絵画では、よくマリアの前に白百合とオダマキとアイリスが置かれていることがあります。その場合、白百合は「純潔」を、オダマキは「聖霊」を、アイリスは「子を失った悲しみ」を象徴すると言われています。オダマキの場合は花の形が鳩に似ているために、鳩で表される聖霊を象徴するものとなりました。マリアは聖霊によってイエス様を宿したとされています。またアイリスは葉が剣のように尖っているために、マリアの刺すような悲しみを表すシンボルとして用いられるようになりました。こうしたキリスト教絵画に登場するシンボルとしての動植物は、聖書の中のエピソードから題材を取られることが多いようです。それゆえ、聖書とシンボルを理解すれば、キリスト教絵画の見方も違ってくることでしょう。

さて、こうしたシンボルを最も多く効果的に用いているのは、私はおそらくカトリックだと思います。ここでキリスト教の各教派におけるシンボルの扱い方を、偶像崇拜との関係で簡単に説明しておきましょう。

まずローマ・カトリックですが、これは最も多く、効果的にシンボルを活用しまして、そこでは聖画も聖像も共に用いられます。一度私はサークルの演奏旅行でハンガリー、チェコ、オーストリアを訪問したことがあるんですけども、そこでカトリックの教会に入ると、至る所に聖画や聖像が散りばめられているといったような感じで飾られていまして、ミサにも参加させてもらいましたが、礼拝が始まる前の段階から神秘的と言ったらいいのか、霊的と言ったらいいのか、とにかく一つ一つの聖画なり、聖像なりがそれぞれ何がしかの意味を表していて、こちらがその一つ一つの意味を完全には理解していなくても、何かその教会の空間が持つ世界に引き込まれるというような経験をしました。このあたり、カトリックのシンボルの使い方、また礼拝装置の使い方はうまいなと思います。

続いて東方正教会ですが、これはカトリックほどではないにしても、効果的にシンボルを活用します。偶像崇拝との関係で立像はありませんで、イコン（聖画像）と呼ばれる平面画のみです。一度学生時代に京都にある正教会を訪れたことがありますが、至る所にイコンが飾られ、イコノスタシス（聖障）と呼ばれるイコンで覆われた壁で聖所と至聖所が区切られていました。東京に来て、神田のニコライ堂も訪問させていただいたことがありますが、やはり雰囲気には圧倒されます。

最後にプロテスタントです。ローマ・カトリックや正教会と比較して、シンボルに関しては一番厳しい態度を取っています。教会の建物もシンプルな造りのものが多く、装飾も簡素です。偶像崇拝との関係でイコンも聖像もありません。宗教改革の時にそうしたものは偶像崇拝に当たるとして撤廃していったのですが、今となっては少しやりすぎた感があると思うのは私だけでしょうか。もっとカトリックや正教会から学び、シンボルや礼拝装置を多用して自分たちの世界観に引き込む工夫をしても良いような気がします。私がヨーロッパのカトリックの教会で経験したように、また京都や神田の正教会で経験したように、シンボルはそれを通り越した奥にある意味を、時には言葉以上に私たちに伝えてくれる働きをするのですから。

そもそも私たちプロテスタント教会は、偶像崇拝とは何なのかということをもっと神学的に突き詰めなければならないのではないのでしょうか。像や絵画を飾れば、それで即偶像崇拝となるというような単純な話ではないと私は思います。像であれ、絵画であれ、何かのスローガンであれ、人間の創り出したものにすぎないそれらのものに人々が絶対的な価値を帰してしまうなら、それは確かに神ならぬものを神とする偶像崇拝でしょう。しかし像も絵画も、大抵の場合はそれを通してその奥にある信仰的なものを映し出してくれる、そしてそれらを有効に伝えてくれるもの、そういう意味ではシンボルです。このように偶像とシンボルの区別をしっかりとつければ、私たちプロテスタント教会はもっとシンボルや礼拝装置を効果的に用いて自分たちの世界観に人々を引き込むということをもよいと思うのです。

またシンボルというのは、何も絵とか像に限ったものではありません。ここで今日の聖書箇所のお話に立ち帰れば、イエス様のお弟子さんたちが子どもたちを連れて来た人々を叱った時、その叱るという行為が、人々にとって、イエス様の集団が子どもたちを拒絶する集まりだというメッセージを発するシンボルになってしまっていたことでしょう。

御自分の群れがこのようなシンボルになりかけた時に、イエス様は憤られ、子どもたちを御自身のもとへと招かれました。私は、これは今の教会にとって非常に大切なメッセージだと思います。

私たちは教会の日々の歩みの中で、どれほどかつて「子供たちをわたしのところに来させなさい」と招かれ、そして今も子どもたちを教会へと招いてくださっているイエス・キリストを示すにふさわしいシンボルとなることができているのでしょうか。

大人の都合ばかりが優先され、子どもが疎んじられるなら、私たちはそのような群れであるというメッセージを教会の内外に発することになってしまいます。私たちの行い一つひとつが、私たちの信仰を表すシンボルだということを決して忘れないよう

にしましょう。子どもの教会に携わる者もそうでない者も、子どもを持つ者も持たない者も、教会全体が子どもと向き合っ、「自分たちは子どもたちとともに歩むことによって、一緒に神の国へと進んでいく家族なんだよ」というメッセージを発していきたい。私たちの姿がそうしたシンボルとなることができるように、イエス様は今日の聖書箇所を通して私たち一人一人に語りかけておられるのです。願わくはこの礼拝のひと時、私たち、イエス様のこの語りかけに豊かに耳を傾けることができますように。この府中の地に神様の家族を表す群れを皆で一緒に形作っていきたくと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——